新宗連スローガン
信教の自由を守ろう
信仰心を広めよう
宗教協力を進めよう
世界の平和に貢献しよう

新宗教新聞

2018年（平成30年）
8月27日
第1105号

発行所
新日本宗教団体連合会
（略称 新宗連）
〒151-0053
東京都渋谷区代々木5丁目57番10号
電話（03）3468－5551（代表）
（03）3468－5588（編集）
大阪事務所 〒550-0006
大阪市西区江之子島1丁目8番21号111
電話（06）6443－7178

8.14式典

『絶対非戦』を誓う

先師の平和への想いと信念 継承を

新宗連青年会

新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会、宮口弘道委員長）は8月14日午後6時から、東京・九段の国立・千鳥ケ淵戦没者墓苑で第53回「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典（8・14式典）」を挙行した。新日本宗教団体連合会（新宗連、岡田光央理事長）の加盟教団代表はじめ各界来賓、会員・信者ら約200人が参列し、心を一つにして戦争犠牲者に慰霊・供養の誠を捧げ、「絶対非戦」と世界平和への誓いを新たにした。（2面に主催者と新宗連代表あいさつ、平和へのメッセージ―全文―掲載）

千鳥ヶ淵戦没者墓苑に集う

当日は猛暑の中、午前から青年らが懸命に設営にあたり、式典開式を迎えた。

はじめに新宗連青年会の宮口弘道委員長が主催者あいさつ。式典の意義と歴史を述べた上で、今年2月、青年会が派遣した「第26次アジア青年平和使節団」に参加し、タイ・ミャンマーにある先の大戦の戦跡や慰霊碑を巡り、6月には激しい地上戦が行われた沖縄を訪れ、慰霊を行ったことなどを振り返った。

そして「8・14式典」での「平和の祈り」こそが、新宗連青年会の平和活動の原点であり、「すべてのいのちを尊ぶ」精神が新宗連青年会のあらゆる平和活動を展開していく基盤であることを述べ、「すべての戦争犠牲者に対し、真心からの祈りを捧げ、『すべてのいのちを尊ぶ世界』の実現に向け、『世界平和』と『絶対非戦』への誓いを新たにさせていただきます」と力強く決意を披歴した。

続いて、新宗連を代表し、岡田光央理事長があいさつ。「忌むべき戦争は、人間の正気を踏みにじった破壊行為に他なりません」と述べ、御木徳近初代理事長と庭野日敬第二代理事長の戦争の悲劇と非戦の思いを表した言葉を重ねた。

また、新宗連が宗教協力を推進し続け、その精神が新宗連青年会にも引き継がれ、第1回式典（1962年）から今日まで「青年たちの赤誠によって本式典は連綿と継続されて参りました。必死やむを得ざる青年の衝迫に根ざした平和活動に対し、心からの称賛と感謝を贈る」と称えた。

そして「ここに参列したお一人お一人と共に、先達の志とこれまでの歩みに想いを馳せ、真心をもってすべての戦争犠牲者の御霊の平安をお祈りさせていただきます」と述べた。

青年女子による献灯、加盟教団の青少年による折り鶴の奉納の後、教団別礼拝。六角堂内で10教団による合同の祈りが捧げられる中、式典に参列した17教団の代表らが順次祭壇前で礼拝を行った。この後、加盟教団の少年少女らが祭壇前に整列し、参列者と共に「ふるさと」を合唱した。

「平和へのメッセージ」を、立正佼成会会員の坂本貴司氏が発表。坂本氏は中学、高校で教団の平和学習会に参加したことから、戦争への意識が変わり、高校2年の時、参加したフィリピンでの平和学習を通し、同国の学生と被害・加害の過去を超え握手を交わした体験を述べた。

坂本氏は「戦争を始めとする争いを止める方法は、『相手を許す事』だと学びました。相手を許せず、攻め続ける事で相手への憎しみは増していき、それが争いになる」として、「私もフィリピンの学生達のように、どのような相手でも許すことができるように、日々修行させて頂く事をお誓い致します」と決意を述べた。

メッセージ発表後、宮口委員長の先導により、参列者全員で「平和の祈り」を捧げ、戦争犠牲者への慰霊と絶対非戦、世界平和の実現への誓いを新たにした。

教団別礼拝―六角堂で合同の祈りが続く中、教団代表者が順次礼拝を行った

青年女子による献灯。慰霊と平和への祈りを込めて、ともし灯を捧げる

全国戦没者追悼式

政府主催

平成の先に継ぐ 平和への願い

標柱に向かい黙祷を捧げる天皇皇后両陛下（15日正午）

終戦から73年となる8月15日、政府主催の「全国戦没者追悼式」が、東京都千代田区の日本武道館で開催された。天皇皇后両陛下臨席のもと遺族、政府関係者、各界代表など約7000人が参列した。

追悼式は午前11時50分に開式。安倍晋三首相は式辞で「戦争の惨禍を二度と繰り返さない。歴史と謙虚に向き合い、どのような世にあっても、この決然たる誓いを貫いてまいります」と述べた。安倍首相は、昨年に続き日本の加害責任や謝罪には触れなかった。

天皇皇后両陛下が標柱の前にお立ちになり、正午の時報に合わせ、参列者一同で1分間の黙祷を捧げた。続いて天皇陛下が「おことば」を述べられた。その中で、「戦後の長きにわたる平和な歳月に思いをいたしつつ」との表現を新たに加えた上で、「ここに歴史を顧み、深い反省とともに、今後、戦争の惨禍が再び繰り返されないことを切に願い、全国民と共に、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し、心から追悼の意を表し、世界の平和とわが国の一層の発展を祈ります」と平和を願う思いを表した。「深い反省」の言葉は3年続けて述べられたもの。来年4月に退位を控えた陛下にとって、最後の式典臨席となった。

この後、衆参両院議院議長と最高裁判所長官、戦没者遺族代表の追悼の辞に続き、各都道府県と一般戦災死没者、原爆死没者等の遺族代表者、各界、団体の代表者の献花が続いた。

首相、靖国神社に玉串料奉納　閣僚は参拝せず

安倍首相は8月15日午前、靖国神社に自民党総裁補佐の柴山昌彦氏を通じて玉串料を自民党総裁として奉納した。首相の終戦記念日の玉串奉納は6年連続。同日、閣僚の参拝は昨年に続いて無かった。

西日本豪雨被災地支援

VOWSボランティアが始動

8月4日から広島県三原市で活動展開

新宗連青年会
WCRP日本委

西日本豪雨災害に際し、新宗連は7月30日、緊急の被災地支援として「平成30年7月豪雨」に伴う国際救援金勧募を加盟教団に向けて開始し、現在も加盟教団から相次いで浄財が寄せられている。

また、新宗連青年会は昨年の熊本地震災害でボランティア活動を展開した、世界宗教者平和会議日本委員会（WCRP日本委）と協働するVOWS（バウズ・Volunteers of WCRP&SYL）を再結成し、ボランティアを募集。8月4日から被災地へのボランティア派遣が開始された。

8月は毎週土日に26日まで4次にわたり派遣。加盟教団からのボランティア約60人が、広島県三原市（「栞」参照）本郷町を中心に被災家屋の片付けや床下の土砂掻き出しなどの活動に努めた。

被災者や被災地域の復旧には依然として多くの課題があり、多くの支援が求められていることから、VOWSとして9月以降もボランティア派遣を継続することを決定、引き続き参加を呼び掛けている。

家屋の片付けに取り組む（第3次 19日）

靖国神社の「公式参拝」に関する意見書を提出

新宗連信教委

意見書を手交―写真左から山口本部長、力久委員長、鈴木副委員長（7月27日）

新宗連信教の自由委員会（信教委、力久道臣委員長）は7月27日午後、力久道臣委員長と鈴木裕治副委員長が東京都千代田区の自由民主党本部を訪れ、安倍晋三内閣総理大臣宛ての「靖国神社の『公式参拝』に関する意見書」（2面に全文）を、自民党組織運動本部長の山口泰明氏に手交した。意見書は山口本部長を通して、安倍晋三総理に提出される。

意見書では、新宗連が毎年8月14日、国立・千鳥ケ淵戦没者墓苑で「8・14式典」を開催できるのは「信教の自由」が守られているためであることを説明。戦争犠牲者の慰霊・追悼は、国民それぞれが自身の信じるあり方でなされるべきと主張する。

また、総理はじめ閣僚の「公式参拝」は純粋に宗教的なものではなく、政治的なものになっているとして、「政治家が宗教団体を政治利用することは当該宗教の宗教性を毀損するものと、深く憂慮」すると訴えている。

全日仏、要請書を提出

全日本仏教会（全日仏、鎌田隆文理事長）は7月30日、安倍総理宛てに「首相及び閣僚の靖国神社公式参拝に関する見解並びに要請」文書を、山口本部長に手交した。要請書では、「公式参拝」が憲法の「信教の自由」「政教分離」原則に抵触し、「靖国神社が今もなお国家の中心的な戦没者追悼施設であるかのような誤解を招くことになりかねません」と懸念を表している。

滴々抄

「人のために」こそ信仰の原点

2歳児を救った男性の精神に思う

今年の夏は、例年以上の猛暑となり連日各地で最高気温を記録した。

その猛暑の中、7月に発生した「西日本豪雨」による被害が発生した各地でボランティア活動が展開されている。新宗連青年会も、WCRP日本委員会と協働でVOWSを再結成し、現在、広島を中心に活動を展開。毎週末に加盟教団の青年たちが汗を流しているが、熱中症には十分注意していただきたい。

被災された方々のためにボランティア活動ができる精神には、「お互い様」と「人のために」の2つがあると考える。前者は、もしかしたら我が家が、豪雨の被害に遭ったかもしれない。すると誰かの力が必要になる。「困った時は、お互い様」精神で活動することではないか。そして後者は、純粋に誰かの役に立ちたいと常日頃想い続けている精神で活動する。特に「人のため」とは、よく使う言葉かもしれないが、それを素直に行動に表せるか―。時には、躊躇してしまう場合もあるかもしれない。

そんなことを考えていると、8月15日の朝、テレビから速報が流れた。山口県で2歳の男の子が行方不明になり大掛かりな捜索が続いていたところ、大分から自主的に捜索に関わった男性に発見されたニュースでした。

何よりも感心したのは、颯爽と現れて、ものの30分で男の子を発見した「ねじり鉢巻」の男性でした。年齢を感じさせない行動力とその原点となっている精神に感銘を受けた。インタビューの中で、65歳で魚屋を辞め残りの人生は、これまで多くの人に支えられたのでその恩返しのためにと決意され、ボランティア人生に没頭されたとのこと。

純粋な気持ちを語られている目の輝きを久しぶりに見た。まっすぐな気持ちで恩返しがしたいと車中泊をされながら全国を駆け巡られる姿こそ、「人のため」の象徴のように思えた。

困った時はお互い様と、人のために何かお役に立ちたいとの精神こそ信仰の原点であると思う。自分の幸せと人の幸せは比べられない。自分も人様も、そして社会全体が幸せであることこそ、平和の原点であると、猛暑の夏に感じた。（力久道臣・善隣教教主）

栞（しおり）

広島県三原市　7月6日に起こった西日本豪雨で、広島県三原市は浸水や土砂崩れなどにより甚大な被害を受け、8人が死亡している。もっとも浸水被害が大きかった本郷町地区では、沼田川が支流8ケ所で決壊し、浸水区域は700ヘクタールに達し、約80戸が床上浸水し、9戸が損壊した。4千棟余りが浸水した岡山県倉敷市真備町地区より規模は小さく、メディアでもあまり取り上げられていないが、復興に向けたさらなる支援が必要とされている。（1面）

宗教をめぐるさまざまな問題のご相談窓口
宗教もしもし相談室
03 3466-9900
受付●月曜→金曜／正午→午後4時
公益財団法人 新日本宗教団体連合会

解脱会伝記編纂委員会編
新版 解脱金剛伝 全3巻
A5判 上製函装 定価3000円（税込み）
世相善導、人心救済への道筋を説かれた解脱会会祖・解脱金剛（岡野聖憲）の生涯を全1549頁、3巻に収めた。会祖亡き後、その人格に触れて自らの内に深い帰依心を培い、世のため人のために生きるための学びの土台となる書。第1巻＝生誕から事業の失敗、大成を経て宗教の世界に目覚めていく前半生を描く。第2巻＝昭和4年に立教して以来、人心救済の道一筋に生き、教えの土台を完成するまでの事績を辿る。第3巻＝戦時下の厳しい時代の中で縦横無尽に教えを説き、救済活動を展開し、遷化されるまでの歩みを記す。
解脱会
〒160-0007 東京都新宿区荒木町4番地
TEL 03-3353-2191（代表）Fax 03-3353-3055

清文社
宗教法人の税務調査対応ハンドブック〔宗教法人税制と法制の解説を含めて〕
石村耕治 編
A5判3780円
平成25年からの新・税務調査手続にも対応！
宗教法人と税務調査についての基礎知識を中心に整理し、コンパクトに解説した、実務家・宗教関係者必携の一冊。
公益財団法人 日本宗教連盟推薦！
〒101-0047 千代田区内神田1-6-6
☎03(6273)7946 FAX03(3518)0299
http://www.skattsei.co.jp〈価格税込〉

芸術生活社【芸生文庫】
高齢期を快く生きるための"人生の道しるべ"
御木徳近著 パーフェクト リバティー教団第二代教祖が、宗教家として悟りと長い人生経験、多くの人との出会いから、高齢期を心豊かに暮らすための新しい生き方を提唱する。■定価700円（税込）
老春誦歌（ろうしゅんおうか） 長生きの秘訣
〒150-0047東京都渋谷区神山町16-1
電話03-3469-1153 FAX03-3465-6867

南雲堂
美容と健康寿命の秘策！
認知症予防★お口の体操
『みんな笑顔、みんな元気！』DVD
監修・作詞：太田哲二 作曲：森重恭典／歌・実演：恵中瞳
（体操解説・歌詞収録のブックレット付）
定価（本体2000円＋税）
●収録内容（歌と体操の実演）
■アッカンベー体操／舌の動きや首を回して、筋肉を活性化させて、リンパの流れを良くする。■パタカラ体操／魔法の言葉『パ・タ・カ・ラ』を使って口を大きく動かして脳に刺激を与え、認知症予防！■ラップ・ラップ体操／早口言葉や落語の寿限無をラップのメロディにのせて歌うことで手・眼・口・全身の運動機能を向上させる。
〒162-0801 東京都新宿区山吹町361
☎03-3268-2311 FAX 03-3260-5425
http://www.nanun-do.co.jp/

佼成出版社
「宗教者の役割」「信仰の本質」を問う異色の評伝
〈大逆事件〉と禅僧内山愚童の抵抗
眞田芳憲
四六判／240頁 本体2000円＋税
日本近代史における最大の思想弾圧「大逆事件」に連座し、刑死した禅僧・内山愚童（1874～1911年）。社会主義者、無政府主義者としてこれまで語られがちであった愚童の思想と行動を、本書は仏教者としての側面から仔細に検証。その知られざる実像を明らかにする。
〒166-8535 東京都杉並区和田2-7-1
☎03(5385)2323 FAX03(5385)2334
http://www.kosei-shuppan.co.jp/

白馬社
合掌ができない子どもたち
浄土真宗本願寺派福賢寺住職 三上章道
四六判 定価1260円
「本願寺新報」の編集長を二十年に亘って務めてきた著者が、合掌ができない子どもたちとの出会いを契機に、戦後の日本社会が戦慄すべき―薄縁社会―となったプロセスを追い、その原因が宗教心の喪失にあることを解き明かす。そして新たに現出した「原発問題」にも、同根の原因があることを洞察していく。日本人の心の問題にするどく迫り、根本的解決への提言をまとめた必読書。
〒612-8469 京都市伏見区中島河原田町28-106
TEL 075(611)7855 FAX 075(603)6752
http://www.hakubasha.co.jp 価格税込

ハーベスト社
「世界救世教」に関する初めての本格的研究
療術から宗教へ
世界救世教の教団組織論的研究 隈元正樹著 本体価格3000円＋税
浄霊と称する療術で、第二次世界大戦以後に教勢を伸ばした世界救世教を事例として、呪的宗教の組織化を中心とした教団統合の問題を明らかにする。
近現代日本の宗教変動 実証的宗教社会学の視座から
寺田喜朗・塚田穂高・川又俊則・小島伸之編著 本体価格3800円＋税
西東京市向台町2-11-5
Fax042-467-8661 TEL042-467-6441

緊急出版 カトリック大阪教区神父 西山俊彦
平和憲法が平和への道、改憲は戦争への道
―わたしたちが核戦争の加害者とならないために―
世が平和ボケにあろうとも、一時すでに遅しと後悔しないために、平和憲法の真価を見直す素養まで捨てるわけにはいかない。
●1400円＋税 四六判並製
248頁 ISBN 978-4-286-19691-6
文芸社
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
☎03-5369-2299 FAX.03-5369-3066
https://www.bungeisha.co.jp
書籍のご注文はお近くの書店またはブックサービス☎0120-29-9625、ネット書店まで

新宗連青年会

青少年育成セミナー案など承認

新宗連青年会　第3回委員会を開催

新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会、宮口弘道委員長）は8月13日午後3時から、東京・代々木の新宗連会館で平成30年度第3回委員会を開催した。

第53回「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典（8・14式典）」の準備状況などについて確認した後、7月7、8日に長崎県で開催した「ユースフォーラム2018」の報告が行われた。

続いて、来年2月21～24日に派遣する「第9回沖縄慰霊平和使節団」の趣旨、行程について協議を行い、原案通り承認した。

また、今年11月11日に開催する「第7回青少年育成セミナー」については、同日午前中に開かれた準備委員会の協議を踏まえ、サブテーマを「宗教とは何か―信仰～真の平和を生み出す青年リーダーの育成」に向けた今後の布教や宗教実践社会変化と教団の課題」とし、メーンテーマ「国民皆を再考する機会とすることを提案。新宗連事務局員が現代の宗教をめぐる状況について講義を行い、これを受け小グループに分かれ議論を行うことを承認した。

さらに8月4日からボランティア派遣を開始したVOWS（バウズVolunteers of WCRP&SYL）については、派遣期間の延長を申し合わせた。最後に地方連盟の活動状況、新宗連活動などについて報告が行われた。

「8・14式典」折鶴　お焚き上げ

第53回「8・14式典」実行委員会（鈴木快彰実行委員長）は8月20日午後1時半から、埼玉県北本市の解脱会「御霊地」の浄炎場で、同式典に加盟教団会員信徒をはじめ全国から献納された折鶴の「お焚き上げ」を行った。

折鶴が炎に包まれる中、参加教団の青年代表が教団別礼拝を行った。この後、折鶴を一束一束、炎に投げ入れたが、折鶴にはそれぞれ趣向が凝らされ、思いを込めたメッセージなどに感嘆の声が挙がった。最後に参列者全員で式典が無事催行されたことへの感謝と、世界平和を祈願して黙祷を捧げた（写真）。

第33回情報交換会

支縁のまちネットワークと共催し　宗援連

宗教者災害支援連絡会（宗援連、島薗進代表）は7月31日午後4時半から、京都市東山区の和順会館で「第33回情報交換会」を開催した。

今回は、支縁のまちネットワーク（宮本要太郎・渡辺順一・生田茂夫共同代表）と共催し、第1部は「非日常支援と日常支援をつなげる―災害救援と寄り添い支援」をテーマに支縁のまちネットワークとの交流を行った。

宮本要太郎共同代表のあいさつの後、三浦紀夫氏（ビハーラ21事務局長、真宗大谷派僧侶）が「多職種連携の中の宗教者―ビハーラ21の取り組みから」、渡辺順一氏（羽曳野希望館代表、金光教羽曳野教会長）が「シェルター事業を通じて―日常支援の中での非日常支援」をテーマにそれぞれ報告を行った。

小憩後、第2部として大阪北部地震（6月18日）について宗援連世話人の稲場圭信氏（大阪大学大学院教授）が「大阪北部地震と西日本豪雨の被害と宗教界の支援の状況」報告と情報共有を行った。

この後、真如苑の救援ボランティア（SeRV）や、真宗大谷派、世界宗教者平和会議日本委員会（WCRP日本委）と新宗青年会の協働ボランティアーVOWS、天理教のひのきしん隊の西日本豪雨等の支援活動（予定も含む）が報告された。

報告を行う三浦氏

4協議会で平和学習会

新宗連

新宗連が全国の総支部・協議会で開催している「憲法改正と国民投票」をテーマとする平和学習会。7月26日から8月26日にかけて、以下の4協議会で開催した。

7月は、日胆地区協議会（29日、室蘭市、講師＝山田匡男新宗連総局長）。8月は、道央地区協議会（19日、札幌市、講師＝山田総局長）、愛媛県協議会（同日、松山市、講師＝梶山貴史新宗連大阪事務所主任）、鳥取県協議会（26日、鳥取市、講師＝佐原透修新宗連事務局長）。

東京のイスラム社会学ぶ講座

東京都人権プラザ

東京都の施設「東京都人権プラザ」（指定管理者＝東京都人権開発センター）は7月14日午後2時から、東京都港区の同プラザで都民講座「東京のイスラム社会」を開催した。

講師に日本イスラーム文化センター／マスジト大塚事務局長のクレイシ・ハールーン氏を招き、イスラームの基本的な教えから、日本におけるムスリム（イスラム教徒）の歴史、マスジト大塚の各種の支援活動などについて講演した。

南大塚にあるマスジト大塚は、東日本大震災にあたり近隣の人々に協力を呼び掛け、炊き出しや物資支援を展開。NHKの報道番組で放映され、「これを契機に、9・11テロ（2001年）で怖いイメージで誤解されていたムスリムへの理解が図られた」という。

ハールーン氏は「困っている人を助けるのは神の命令であり、当然のこと。ジハードを『聖戦』と訳すのは誤りで、『神のため努力する』が正しい。困っている隣人に手を差し出すことはジハードです」と語った。

ハールーン氏

新宗連 信教の自由委員会―

靖国神社の「公式参拝」に関する意見書（全文）

内閣総理大臣
安倍 晋三 殿

今年も、終戦記念日が近づいてまいりました。

私たちは、多年、政府を代表する総理はじめ閣僚が、靖国神社に「公式」に「参拝」をすることは、憲法に定める「政教分離」原則に違背し、「信教の自由」を侵害するものであり、厳に慎まれますようにと歴代の内閣総理大臣に申し上げてまいりました。

私たちは、毎年、8月14日に国立・千鳥ケ淵戦没者墓苑で「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」を開催し、多数の宗教団体が、それぞれの礼拝様式に則って、戦争犠牲者の慰霊・追悼をしております。本式典は、「信教の自由」が守られているからこそ開催できるものであり、「信教の自由」とそれを制度的に保障する「政教分離」原則をはじめとする憲法条文は、総理、閣僚、政治家の皆様によって厳しく遵守していただくものであります。

このように戦争犠牲者の慰霊・追悼は、国民それぞれが自身の信じるあり方でなされるべきです。

しかし、総理はじめ閣僚による靖国神社への「公式参拝」は、特定宗教の「援助・助長」に当たり、その宗教が他のものよりも価値が高いとの評価を、政府が示す行為となりえます。

それは「政教分離」原則に違背し、他の宗教の「信教の自由」を侵害しうると懸念しております。

また、「公式参拝」は、純粋に宗教的なものではなく、政治的なものになっていると感じざるをえず、政治家が宗教団体を政治利用することは当該宗教の宗教性を毀損するものと、深く憂慮いたします。私たちは、国会議員個々の「信教の自由」を否定するものではありましては、政府が、現状におきまして、政府要職に就く総理及び閣僚が、民間の宗教施設に「公式参拝」することによって、政治的なメッセージが発せられていることは否定できず、総理はじめ閣僚の「公式参拝」に関しては、慎重にならざるをえないと思量いたしております。

安倍内閣におかれましては、「信教の自由」と「政教分離」原則を、再度、ご確認たまわり、国民誰もがわだかまりなく戦争犠牲者を追悼することができるよう、賢明な判断と行動をとられますよう、重ねてお願い申し上げます。

平成30年7月27日

新日本宗教団体連合会
信教の自由委員会委員長
力久 道臣

【諸会議　報告】

白眞勲氏が憲法改正の手続きや発議時期など解説

憲法研

新宗連憲法研究会（憲法研、澤田晃成座長）は7月23日午後2時から、東京・代々木の新宗連会館で第47回研究会を開催した。

はじめに参議院憲法審査会幹事の白眞勲参議院議員（立憲民主党）を講師に学習会を催した。

白氏は憲法改正の手続きについて解説し、国民投票法の改正案が与野党間で異論がないにもかかわらず、本国会で採択されなかったことについて説明した。

続いて憲法改正発議の時期について、①今年の臨時国会後半（12月上旬）②来年通常国会前半（1月下旬）③来年通常国会後半（6月上旬）④それ以降などの可能性があることを解説。③が参議院で確実に与党が3分の2を占めた状況で発議ができる最後の機会であるため、可能性としては最も高いと指摘したが、「どちらにせよ窮屈な日程。国民投票法の改正案を通せなかったことが、後々響いてくるのではないか」と予想。しかし、衆参両院で3分の2を占める自民党は「いつでも発議できることは事実」と憲法改正発議が、野党の理解がないまま強行されることに懸念を示した。

この後、研究会では今後の活動について意見交換を行った。

「公式参拝」意見書、今後の活動について意見交換

信教委

新宗連信教の自由委員会（信教委、力久道臣委員長）は7月27日午前11時から、東京・代々木の新宗連会館で第30期第1回委員会を開催した。

諸報告の後、首相・閣僚に対する靖国神社「公式参拝」に関する意見書について、意見交換を行った。この結果、一部文章の表現などを変更し、同日午後、自民党に提出することを申し合わせた。（関連記事1面）

続いて、今後の活動について意見交換を行い、これを基に、次回委員会で来年度の事業計画を作成することを申し合わせた。

新宗連青年会　第53回8・14式典　千鳥ヶ淵戦没者墓苑

主催者あいさつ

平和を伝えていく心を育て継承

新宗連青年会委員長　宮口 弘道

本日は「第53回戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」に、各界の御来賓をはじめ、新宗連加盟教団の代表者、信徒、会員の皆様方に、多数の御参列をいただき、主催者を代表して厚く御礼申し上げます。

また、本年も全国各地からたくさんの折り鶴を御奉納いただきました。この折鶴一羽一羽には平和の祈りが込められています。全国各地からの真心に心から感謝申し上げますとともに、この祈りを結集して本日の式典をとり行わせていただきます。

本式典では、教義や信条の違いを乗り越え、加盟教団それぞれの礼拝様式によって、すべての戦争犠牲者に慰霊供養の誠と感謝を捧げています。そして、「すべてのいのちを尊ぶ世界」の実現と「世界平和」「絶対非戦」への誓いを新たにする式典として続けられてきました。8月14日夕刻での開催は第3回目から毎年終戦記念日前夜に平和を祈願する恒例行事として定着してきました。また、第22回から「戦没者合同慰霊」という名称で行ってきたものを「戦争犠牲者慰霊」へと変更し、国内外を越え、また軍人・軍属「すべての戦争犠牲者」を各々の宗教による礼拝の形式で慰霊する「教団別礼拝」を続けています。

これまでこの式典を継承してくださった先師先達は、この式典での祈りを続ける中で多くの具体的な行動が生み出されていきました。

代表的なものとして、1974年から現在まで続く「アジア青年平和使節団」があります。

私自身、今年2月に派遣した「第26次アジア青年平和使節団」に参加し、タイ・ミャンマーにある先の大戦の戦跡や慰霊碑を巡り、多くの悲しい歴史を目にし、心が痛みました。そして、「二度と戦争はしてはならない」との「絶対非戦」の決意を強く抱き、タイのナムトクの丘において、日本軍による泰緬鉄道建設で犠牲になられたアジア人労務者、連合軍捕虜の方々をはじめとする、すべての犠牲者の御霊に対して慰霊供養を捧げてまいりました。

また6月23日には、住民をも巻き込んだ約3カ月にも及ぶ激しい地上戦が行われた沖縄で、新宗連青年会代表者として慰霊をさせていただきました。そして、今年、7月に200人以上の犠牲者が出た「西日本豪雨」の被災地で、復興支援ボランティア活動をおこなっております。

「8・14式典」の「平和の祈り」こそが、新宗連青年会の平和活動の原点であります。この式典に込められた「すべてのいのちを尊ぶ」精神が青年会のあらゆる平和活動を展開していく基盤となっています。

心からの祈りとそれに基づいた活動のほかにも、平和活動を通して感じた自分の「思い」「気づき」を人へ伝えていくことがなによりも大切なことと考え、新宗連青年会では、「私のことばで伝えたい」とのテーマを掲げて活動しています。私たち一人ひとりの「ことば」や「姿勢」によって、自ら感じた「思い」を多くの方々へ「伝えていきたい」という心を育て、そして「伝えていこう」という行動を目指しています。これは、先師先達が積み重ねてきた平和への想いと信念の私たちなりの継承であります。

本年は、先の大戦の終結から73年が経ちます。しかし現在も世界各地では紛争やテロなどによる犠牲者、核兵器による恐怖など、心を痛める事件や出来事が続いています。

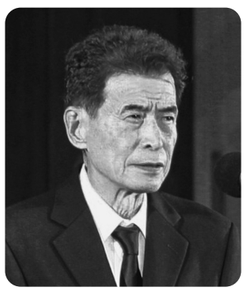
本日は、ご参列の皆さまと共に、すべての戦争犠牲者に対し、真心からの祈りを捧げ、「すべてのいのちを尊ぶ世界」の実現に向け、「世界平和」と「絶対非戦」への誓いを新たにさせていただきます。

皆さま、どうぞよろしくお願い申し上げます。

新宗連代表あいさつ

先達の志と歩みを想い 真の祈りを

新宗連理事長　岡田 光央



「第53回戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」の開催にあたり、新宗連を代表して、ごあいさつを申し上げます。

本日は、きびしい暑さの中、新宗連加盟教団の代表者をはじめ、各界のご来賓にご参列をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。

そして、新宗連加盟教団の会員、信徒の皆さまにも、多数ご参列をいただきました。

皆さまと御一緒に、戦争で私どもの犠牲となられたすべての御霊に対し、鎮魂の祈りをお捧げ申し上げたいと存じます。

忌むべき戦争は、人間の正気を踏みにじった破壊行為に他なりません。

新宗連初代理事長・御木徳近先生は、戦争について、次のようなことばを残しておられます。

「苦心と努力の結晶を、一挙に、しかも根こそぎ破壊しつくす戦争の悲劇は、何としても、これを未然に防がねばなりません。そして、そのためには、世界のあらゆる宗教が、狭い小さい宗我心を捨て去って協力することである」と訴えられました。

また、第二代理事長・庭野日敬先生は、次のように諭されました。

「戦争を起こしそうな客観的な諸条件をなくすために、世界の諸宗教者と、危険な芽を小さなうちにつみとる努力をしなければならない」

爾来、新宗連は、絶えざる努力を積み重ねて、宗教協力を推進して参りました。

その宗教協力の精神は、新宗連青年会に引き継がれて来ました。56年前の第1回式典より今日まで、青年たちの赤誠によって本式典は連綿と継続されて参りました。必死やむを得ざる青年の衝迫に根ざした平和活動に対し、心からの称賛と感謝を贈るものであります。

私たちは、新宗連の礎を築かれた先達の高い志と捨身実践の平和活動を継承し、次代に繋いでいく決意をあらたにさせて頂きたいと存じます。

先の戦争で亡くなられた多くの人々は、私共の犠牲となりました。犠牲者は何を願っているのでしょうか。

残された人々の平安と荒廃に向かう人類の魂と心の霊性復活を願っているに違いありません。

私を含め、ここに参列したお一人お一人と共に、先達の志とこれまでの歩みに想いを馳せ、真心をもってすべての戦争犠牲者の御霊の平安をお祈りさせていただきます。真（まこと）の祈りにより、浄められ高められる霊性を得ることができるのですから。

皆様と心を一つにして、世界恒久平和の招来、ひいては生きとし生けるものの安寧をお祈りさせていただくことをお願い申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

平和へのメッセージ

共に手を取り 争いのない世界達成へ

立正佼成会　坂本 貴司

平成最後の終戦記念の日の前日である本日、平和へのメッセージという大役をさせて頂くにあたり、まず戦争のない日本に生かされている感謝と、戦争で亡くなられた全ての御霊に対し、謹んで慰霊の誠を捧げます。

「平成」という元号には「国の内外にも天地にも平和が達成される」という願いが込められています。この願いの通り、平和な世界を実現するために、多くの仲間とともに歩み続けることを約束します。

私が戦争について初めて学んだのは、小学校の授業でした。主に東京の大空襲、広島、長崎の原爆投下、そして沖縄での地上戦。当時の人々がとても辛い思いをしたという事は、なんとなく理解はできましたが、気持ちに寄り添う事は出来ませんでした。

しかし、中学、高校の時、立正佼成会主催の平和学習会に参加させて頂き、広島、沖縄にて戦地と人々の傷跡、様々な資料を生で見ることにより、私の戦争に対する意識が変わっていきました。

戦争は二度と起こしてはいけないもの、人の中に本来ある優しさを奪ってしまうもの。

この世でもっとも残酷なものであると感じました。そして唯一の核被爆国として声を大きくあげていかなければならないと思いました。日本人は原爆や空襲を受けた純粋な被害者であると思っていた私は、日本人は加害者でもあった事を高校2年生の夏、フィリピンでの平和学習にて学びました。

それは、第二次世界大戦で日本軍が、アメリカ・フィリピンの捕虜を収容所まで83㌔も行進させ、炎天下の中、飢えと渇き、疲労、熱病によって、沢山の死者をだした、後に「死の行進」と呼ばれるものでした。

その事実を知った私は、フィリピン人の学生が「なぜ私と笑顔で話せるのだろう？」と不思議に思い質問をしました。そうすると答えはこうでした。「確かに当時の日本人がした事は許せないし、しかし、ずっと悪いわけではない。私達の様に笑って話し合える今がある」と言って頂き、「私もフィリピンとフィリピンの皆さんが大好きです」と伝えると握手を求められ、最後にはそこにいた学生全員と握手をしたのを強く覚えています。

私はこの経験から、フィリピンだけでなく、私たち青年は日本人の被害だけでなく、危害を加えてしまった過去の事実もしっかりと知り、そして現在も心に深い傷を負っている方々と真摯に向き合い、笑って話し合える今を作っていく事が重要だと知りました。

私が中学・高校時代の平和学習で学んだ事は、戦争という行為は絶対に二度としてはいけないという事、戦争は善悪があるわけでは無いという事、戦争に参加した国は勝っても負けても加害者であり、被害者であるという事。そして、戦争を始めとする争いを止める方法は、「相手を許す事」だと学びました。

相手を許せず、攻め続ける事で相手への憎しみは増していき、それが争いになる。日常生活における争いも相手を許せないという気持ちから生じます。私もフィリピンの学生達のように、どのような相手でも許すことができるように、日々修行させて頂く事をお誓い致します。

現在も争いは止まず、新たな争いが生まれる恐れもあります。ここに集まることのできた皆さんと共に、今こそ、これからの時代を作る青年が手を取り合い、新たな時代に希望を持って生まれてくる子供達の為に、明るい争いのない世界を引き継ぐはたらきをさせていただきたいと思います。

私は、8月24日から、立正佼成会の東京東支教区の中学生、高校生など総勢100名で行かせて頂く、沖縄平和学習の実行委員長のお役を頂戴致しました。

参加者は全員平成生まれです。自分が生まれた「平成」という時代に「平和を達成する」という願いが込められている事を知っている方がその中に何人いるのでしょうか？　この平和学習を通して、戦争の様々な痛み悲しみを知り、相手を許す修行をまずは私から、そして参加者全員が行い、広げていき、平和を成す時代から平和な世の中が続く時代へと変化させる事をお誓いし、平和へのメッセージとさせて頂きます。

合掌

少年少女が参列者と共に「ふるさと」を合唱

歴代教祖の遺徳称え 世界平和誓う

大平和の願い宇宙へ―PL花火芸術　教祖祭 PL

パーフェクト リバティー教団（PL、御木貴日止教主）は8月1日、大阪府富田林市の聖地で、初代教祖御木徳一師、第二代教祖御木徳近師の遺徳を称え、世界平和具現を祈念する「教祖祭」を国内外からの会員が埋めつくす中、厳粛に挙行した。

午後7時10分、典礼係がポルトガル語と日本語で式典の開式を告げると、ファンファーレが高らかに響き渡り、正殿左右に聖火が点火された。板垣信生祭司長（PL東京健康管理センター）、市村寿美副祭司長（サンフランシスコ教会）に続き、正殿左右から98人の祭司が入場し、正殿階段に整列した。

聖弓奉唱、PL遂断詞奉唱の後、板垣祭司長が祭文を奏上。PLの基を築いた初代教祖と、その教えを継承してPLを立教し、数多くの人々を救済した第二代教祖の遺徳を称え、深い感謝を捧げた。併せてPL花火芸術に思いを寄せ、大平和社会実現のために一層の献身に励む決意を誓った。

御木貴日止教主が御木美智代夫人（祐祖、教務総長）と共に、大本庁神霊の前に進み「おしえおや遂断」を行った。続いて参列者に向かい、会場全体を包み込むように、両手を左右に大きく広げ「祝福の神事」を行った。起立した参拝者は〝無我の式〟の姿勢で神事を拝し、念願や感謝の祈りを捧げた。

この後、午後8時から音と光とが競演する「PL花火芸術」に移り、初代教祖の遺志を受け第二代教祖が始めた平和招来を祈念する花火が次々に打ち上げられ、光の芸術を繰り広げた。

今年は「聖地から宇宙へ―大平和を」をテーマに大自然のアフリカのイメージを重ね、雄大な音楽に合わせて、4部構成。新たな演出として、PL会員の願いが花火で表現され、「大平和」の文字を夜空に描く打ち上げ花火や、幕間にレーザービームが採用され、終幕のスターマインでは、轟音と共に多くの花火が噴き上り、周囲を昼間のように明るく照らす中、参拝者は「大平和」の招来を祈願した。

教祖祭に先立ち、同日午後1時過ぎからは、大平和祈念塔低層2階神殿で、「超宗派万国戦争犠牲者慰霊大平和祈念塔年祭」を挙行した。

式典では、板垣祭司長が祭文で、国家間の紛争が絶え間ない現状に言及し、人類が向かうべき共存共栄の、調和による大平和世界の具現のために一層献身する決意を新たにした。続いて御木教主と美智代夫人がゆっくりと神前に進み、聖花を献上し、遂断った。この後、教師代表者4人が聖花を献上し平和を祈念した。

正殿前広場を国内外から参集した会員が埋めつくす中、厳粛に式典が挙行された

『真鏡』から「観音」解説

立教祭 救世真教

救世真教（新井光興会長）は8月3日午前10時から、群馬県高崎市の本部聖地で「第52回立教祭」を執り行った。

式典はみろく太鼓により開幕。参拝者一同で「誓い信条」を唱和した後、斎主の新井光興会長が「立教祭祝詞」を奏上した。続いて斎主と参拝者代表が玉串奉奠を行った。

この後、一同で「天津祝詞」奏上と「立教祭御歌」唱和に続き、「教主様に感謝の礼拝」「萬霊位に供養の礼拝」を行い、新井会長が参列者全員に「御浄霊」を行った。続いて立教前史を含めたDVD映像『教団70年史』を上映した。

新井会長が「御教え」に立ち、DVD映像と当日唱和した「立教祭御歌」の解釈を通して、立教当時の思いを感じたこと、また頻繁に起こる災禍を受けた人たちの一日も早い復旧と幸福を祈願したことを語った。

そして今年5月に新たに発行された『真鏡』（改訂版）の第4項を解説し、観音の「音」とは「人間の本音」のことであり、その本音を聴いてあげることが「観音心」であり、「円転滑脱自由無碍」つまり素直で障害のない自由な心になることと、人を咎めない心を持つことの大切さを説いた。

最後に教団歌「教えのままに」を一同で斉唱し式典を終了した。

自由で、人を咎めない心の大切さを説く 新井会長

日々の幸せ 救祖に感謝

救祖年祭 大日然教

大日然教（折茂美枝代表役員代務）は8月7日午前10時半から、東京・西新宿の本部で折茂なみ救祖の「五十二年祭」を斎行した。

折茂救祖は夫と6人の子と死別するという悲壮な人生の中で、1940（昭和15）年10月に神示を享け、42（同17）年から66（同41）年8月7日に72歳で昇天するまでの24年間、「大神の慈悲は救いなり」と宣し、ひたすら人心救済に努めた。

祭典は太鼓の音で開式し、折茂美枝代表役員代務の祭主のもと、参列者による拝礼と「大日然教祝詞」奏上に続き、祭主が「五十二年祭祭文」を奏上。救祖の慈愛に満ちた導きに感謝を捧げた。この後、玉串奉奠を祭主と来賓、参列者が行い、一同で「大日然教奉唱歌」を斉唱し祭儀を終了した。

折茂代表役員代務があいさつ。毎朝、神前に向かい救祖と話していることを報告し、「特に年祭が近付くと、御救祖様がおっしゃったことが思い出される」と振り返り、生前の思い出を語った。

また戦中、自身が小学校低学年の時に学童疎開したことや、東京大空襲で焼け野原となった都心を離れ立川市で生活した苦労などを話し、戦争の悲惨さ、平和の尊さを述べ、「日々の幸せ、安心を神様、御救祖に感謝することが大切です」と説いた。

祭主の折茂代表役員代務が玉串奉奠

個人の招福と世界平和を祈願

招福神事 天光教

全国から参集した信徒らは、研修会館で提灯を受け取り、大型バスで特設祭場に向かった

大阪市天王寺区の天光教（藤田真造代表役員代務）は7月22日、大阪府松原市内の特設祭場で「招福神事」を斎行した。

同神事は6月30日に総本部において営まれた「厄除祈願祭」とともに、個人の除厄、招福はもとより、広く世界の平和と繁栄と幸福を招く、同教の重要な年中行事で、「御聖火の大祭典」といわれている。

正午、全国から参集した代表信徒が総本部で「出発のことば」を奏上した後、順次、研修会館で提灯を受け取り、徒歩で移動。大型バスに分乗し、大阪府松原市の特設祭場に向かった。

個人祈願の提灯、各教会の提灯や、「世界の戦争御撲滅御実現」「世界的食糧危機の御解消」「世界真の平和御樹立」などの祈願項目を記した大提灯を特設祭場に掲げ、神殿に「生神天光大御神様」を迎え、「御聖火の大祭典」に入った。

大麻行事、祝詞奏上などの後、奉納された提灯などが白衣姿の青年によって聖火台に投げ入れられた。聖火は勢いよく燃え上がり、参列者は一心に招福を祈願した。

実践の大切さを説く

夏季大祭 天恩教

天恩教（鉢呂神龍教主）は8月18日午前11時半から、京都府笠置町の本庁神前で「夏季大祭」を斎行した。

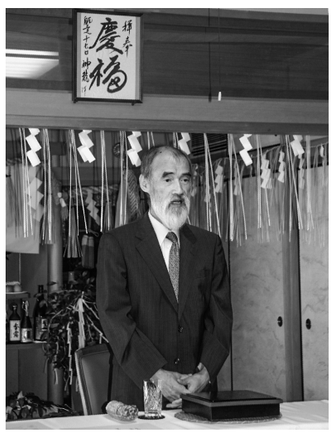
斎主の鉢呂神龍教主と斎員が入座して開式。鉢呂金太郎理事長による修祓に続き、「大祓祝詞」「夏季大祭祝詞」を奏上した。鉢呂教主が神前に進み、深々と礼拝を行った後、鉢呂教主が玉串を奉奠。引き続き、鉢呂日出麿副管長、来賓らが玉串を奉奠した。

斎主と斎員が退座した後、参列者全員で「真者祝詞」を奏上、次いで各教会長と参列者が玉串を奉奠した。参列者は順番に「御神酒」「撤饌」を拝受した。

直会に移り、副管長による開会あいさつに続き、鉢呂教主が「御真教」を行った。

鉢呂教主は年頭の指標として示した「敬愛」について、「神様から『敬愛』される私たちになること」と述べ、新宗連が10月の全国総会で熊本地震犠牲者の慰霊を計画していることや、今年7月に発生した豪雨災害被災地にボランティアを派遣していることなどに触れ、「口だけでなく、実践が何よりも大切な事。立教70年の節目を振り返り、神様に感謝を表していく時」と説いて、真行の姿勢を伝えた。

引き続き、来賓と真者代表挨拶、祝電披露、万歳三唱などが行われ、乾杯の後には恒例の直会・宴会の部に移り、各教会の代表者や教団幹部が踊りや歌を披露して賑わった。



鉢呂教主は「立教70年の節目を振り返り、神様に感謝を表していく時」と述べた

法華経が示す生き方こそ親孝行

戦争犠牲者慰霊・平和祈願の日 立正佼成会

立正佼成会（庭野日鑛会長）は8月15日午前9時から、東京都杉並区の大聖堂で「平成30年次『戦争犠牲者慰霊・平和祈願の日』式典」を開催した。

佼成合唱団による序奏の後、開式。お題目三唱と会員綱領唱和、国歌・会歌の斉唱の後、先の大戦の悲劇について語るナレーションが流された。

青年女子部員代表20人による「奉献の儀」の後、庭野光祥次代会長を導師に読経供養。庭野次代会長が、庭野日鑛会長の「回向文」を奏上し、「仏教の五戒を基本に共生の道を歩む」と誓い、法句経に説かれた慈悲の精神の重要性をあらためて強調した。続いて、庭野次代会長が焼香、献鶴を行った後、全員で「ふるさと」を合唱した。

会員代表による「体験説法」では、長崎教会の渡邉和代子氏が長崎での戦争体験を語った。渡邉氏は長崎市で幼少期を過ごし、父親の転勤で佐世保市に引っ越した後、アメリカ軍による空襲が激化。「火の雨が降るように見えた」と述べ、いつ敵が来るか分からない不安な毎日を送っていた。そして1945（昭和20）年8月9日の原爆投下時には、佐世保市の建物の窓ガラスも震え、長崎市の空が赤く染まっているのが目に飛び込んできたという。

その後、長崎市へと戻り、自身が通っていた小学校の校舎が「平和祈念館」となっていると知り、原爆により23歳の若さで亡くなった元担任の写真をそこで見つけた。その時に、「自分も父の転勤がなければ原爆に遭っていたかもしれない」と考え、「生かされているのに、現状に不平不満を言っている自分が恥ずかしくなった」と、言葉を詰まらせながら語った。両親や祖母、仏に生かされており、「感謝せずにはいられない」と語り、「戦争体験を後世に語り継いでいきたい」と結んだ。

川端健之理事長が焼香・献鶴の後「講話」。前日開催された新宗連青年会の第53回「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典（8・14式典）」で「平和へのメッセージ」を立正佼成会の青年が読み上げたことに触れ、内容を紹介し、「感動しました」と感想を述べた。

また、「人類発祥から4万回（命のバトン）をバトンタッチしてきた。その間、一回も失敗がなかったのは非常に幸運なこと」「親のいない方はいない」と話し、終戦記念日やお盆は「それを思い起こす機会」と説いた。

そして、法華経に示された生き方をすることで「本当の幸せを自分のものにすること」が庭野日敬開祖の願いであると説き、「それが一番の親孝行、先祖供養」になると話した。

さらに、法華経に示された生き方が「仏説観普賢菩薩行法経（懺悔経）」の最後に記されているとして、因果の道理を知ること、「一実の道（変化しない一つの実在）」を信じること、仏はけっして滅するものではないことを自覚することなどを挙げ、さらなる精進を呼びかけた。

青年女子部員代表による「奉献の儀」

絶対非戦の思い込め祈り続ける

原爆犠牲者慰霊祭 大慧會教団（広島・長崎）

大阪府堺市の大慧會教団（石倉寿一次代会長）は6月23日に広島市で、また7月22日に長崎市で「原爆犠牲者慰霊祭」を執り行った。

6月23日午前11時から、広島市の平和記念公園にある原爆供養塔前で「第18回広島原爆犠牲者慰霊祭」。祭儀に先立ち、原爆慰霊碑前で代表献花を行い、石倉寿一次代会長を主導師に参列者と共に大乗経典を奉読。原爆の子の像では、代表者が献鶴を行った。

祭儀では原爆供養塔前に参列者が並び、玄題三唱、献香、献茶に続き、杉本聰爆弾落下中心地碑前に参列者が並び、玄題三唱、会歌斉唱、参列者の代表による献香、献花、折り鶴奉納が行われた。

参列者を代表して小関正子氏が「長崎原爆犠牲者の御霊に捧げる言葉」を言上。小関氏は戦争の過ちを省み、二度と同じ過ちを繰り返さないとした上で、「今日の豊かな日本があるのも、大きな犠牲の上にあります。犠牲になられた方々へ慰霊の誠を捧げます」と述べた。そして、犠牲者の御霊に対し「私たちは永久に御霊の安らかならんことを祈り、平和への道を邁進します」と力強く述べた。

この後、大乗経典の奉読が行われ、最後に石倉次代会長をはじめ、参列者全員が長崎原爆犠牲者の御霊に献花を行った。

第33支部長が「広島原爆犠牲者の御霊に捧げる言葉」を言上。この後、大乗経典の奉読を行った。

石倉次代会長があいさつに立ち、5月10日に逝去した故石倉恒男会長に触れ、「今までと違い、身近な人がいない辛さを痛感している。戦争で身近な人を亡くした方のことを思うと胸が詰まる」と述べ、戦争犠牲者やその家族に思いを馳せた上で「絶対非戦への思いを込め、お亡くなりになられた方の御霊に対して祈り続ける」と力強く述べた。また、同日が「沖縄慰霊の日」であることに触れ、「広島のみならず、全国の戦争犠牲者の御霊に祈りを捧げたい」と結んだ。

また7月22日午前8時から、長崎市の爆心地公園で「第27回長崎原爆犠牲者慰霊祭」を執り行った。原子

原爆の子の像で、代表者による献鶴を行った（広島市）

平和を祈り 犠牲者慰霊

原爆忌・終戦記念日に各地で式典

平和への取り組みこそ

長崎宗教者懇話会 原爆殉難者慰霊祭

長崎県宗教者懇話会（会長＝神﨑正弘真宗大谷派法生寺住職）は8月8日午後7時から、長崎市松山町の原爆落下中心地公園で「第46回原爆殉難者慰霊祭」を執り行った。

同祭典は宗教・宗派を超えて、市民と共に原爆殉難者を追悼し、世界平和への願いを深めるもの。主管は、長崎県明るい社会づくり運動推進協議会（会長＝中村法道長崎県知事）。

懇話会加盟の諸宗教者に加え、世界連邦日本宗教委員会と世界宗教者平和会議日本委員会（WCRP日本委）、広島県宗教連盟のメンバーや市民らが参列。

開式に先立ち、午後6時から純心女子高等学校音楽教諭の松本佳代子氏、下黒崎かくれキリシタン帳方（ちょうかた）の村上茂則氏による「平和への祈り～グレゴリオ聖歌とオラショによる祈り」が行われた。

午後7時に開式。天理教長崎教区雅楽部による「雅楽奏楽」の後、諸宗教混成による「賛歌合唱」の中、田邊治郎天理教長崎教区長による「お清めの儀」、柴本孝夫日本聖公会長崎聖三一教会司祭による「献水の儀」が行われた。日本基督教団長崎古町教会の二人の小学生、日本聖公会長崎聖三一教会の小学生が「平和への誓い」を述べ、新宗連長崎県協議会青年会による「平和の灯」の奉納が行われた。

「慰霊のことば」を福田昌弘立正佼成会長崎教会長と田中恆清世界連邦日本宗教者委員会会長、中村憲一郎WCRP日本委理事が述べた。その中で福田氏は三人の小学生が「平和への誓い」

「本日の慰霊祭を通して、私自身が、まず『明るく、やさしく、暖かく』の姿勢で平和な家庭、社会、国家、そして世界を築いていく取り組みこそが、原爆殉難者の皆さまに対するまことの慰霊に繋がると信じています」と述べた。

下窄英知カトリック長崎大司教区事務所長の先導で参列者全員が黙祷。続いて諏訪神社の巫女による「浦安の舞」が奉納され、宗教者、来賓が献花、参列者全員で「長崎の祈り」を合唱した。

最後に、池田剛康鎮西大社諏訪神社宮司による閉式の辞で終了した。

恒久平和実現に努力

長崎市主催 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

長崎市主催による「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」が8月9日午前10時40分から、長崎市平和記念公園で開催された。今年は初めてアントニオ・グテーレス国際連合事務総長が出席した。

被爆者による合唱で開式し、田上富久長崎市長と被爆者代表、遺族代表、青少年代表によりこの1年間で亡くなった3511人が登載された死没者名簿の奉安が行われ、名簿の累計は17万9226人となった。

続いて五輪清隆長崎市議会議長による式辞、被爆者代表と遺族代表、小学生代表、中学生代表、高校生代表による「献水」、被爆者代表、遺族代表、長崎市長、長崎市議会議長、総理大臣、各国代表等の来賓によって「献花」が行われ、原爆投下時刻の11時2分に合わせて1分間の「黙祷」が捧げられた。

田上市長は「平和宣言」で、核兵器を持つ国々と核の傘に依存している国々のリーダーに向け、国連総会決議第1号で核兵器の廃絶を目標とした決意を忘れず、50年前に核不拡散条約で交わした「核軍縮に誠実に取り組む」という世界との約束を果たすべきことを訴えた。そして、「人類がもう一度被爆者を生む過ちを犯してしまう前に、核兵器に頼らない安全保障政策に転換することを強く求めます」と述べた。

また、昨年相次いで亡くなった核兵器廃絶運動を長年牽引してきた二人の被爆者が、戦争や被爆体験のない人たちが道を間違えてしまうことを強く心配していたとして、「二人が亡くなった今、あらためて『戦争をしない』という日本国憲法に込められた思いを次世代に引き継がなくてはならない」と述べた。

「平和の誓い」では、被爆者代表として田中熙巳氏が自らの被爆体験を語り、「紛争解決のための戦力を持たないと定めた日本国憲法第9条の精神は、各時代の世界に呼びかける誇るべき規範。私は、多くの先人たちの働きを偲びつつ、速やかに『核兵器禁止条約』を発効させ、核兵器のない戦争のない世界の実現に力を尽くす」と誓った。

純心女子高等学校生徒による合唱

続いて、長崎市立山里小学校6年生が、被爆医師・永井隆氏作詞の「あの子」を合唱した。

来賓を代表して安倍晋三内閣総理大臣とアントニオ・グテーレス国連事務総長、中村法道長崎県知事があいさつ。グテーレス事務総長は、すべての国に対し、核軍縮に全力で取り組み、緊急の問題として目に見える進歩を遂げるよう呼びかけ、核保有国には核軍縮をリードする特別の責任があると述べた。「長崎と広島から、私たちは、日々平和を第一に考え、紛争の予防と解決、和解と対話に努力し、そして紛争と暴力の根源に取り組む必要性を、今一度思い出そうではありませんか」と訴えた。

この後、純心女子高等学校生徒による被爆50周年記念歌「千羽鶴」の合唱が行われ、最後に司会が「今日の長崎平和宣言を長崎市民の願いとし、私たちは新たな気持ちで、世界恒久平和の実現に努力していきたいと思います」と述べた。

8月15日 千鳥ヶ淵戦没者墓苑―

終戦記念日に追悼・慰霊行事 続く

キリスト者が輪になり祈る

終戦から73年となる8月15日。今年も東京・九段の国立・千鳥ヶ淵戦没者墓苑では早朝から、宗教者や市民団体などの追悼・慰霊行事が相次いで開催された。

午前7時からはキリスト者有志による「2018・8・15平和祈とう会」が催された。早朝とはいえ、猛暑日をうかがわせる強い日差しが墓苑に差し込み始める中、参列者は開会の祈りに続き、讃美歌合唱、聖書の朗読と「悔い改めの祈り」を捧げた。

この後、日本聖公会の司祭でNCC「障害」と教会問題委員会委員長の橋本克也氏が「平和を実現する人々は幸い」のテーマのもと説教。73年前の広島、長崎の原爆投下とその災禍からの歴史を振り返り、「平和と繁栄は一セットのものである」と述べた。そして人々が偏見や差別から解放されること、憲法9条の大切さなどを説き、平和実現へ歩むことを訴えた。

この後、グループ別祈祷に移り、参列者は墓苑各所で輪になり祈りを捧げた。最後に賛美歌「このこどもたちが」を合唱し閉会した。

午前9時からは、日蓮宗（中川法政宗務総長）主催による「第60回千鳥ヶ淵戦没者追善供養並世界立正平和祈願法要」が勤修された。同法要は墓苑創建の1959（昭和34）年から毎年続けられているもの。

日蓮宗による法要

中川法政宗務総長の大導師、東京4管区の宗務所長の副導師のもと、読経と大導師の表白文奏上、修法師による修法などが勤められた。この後、日蓮宗の松永慈弘総務部長があいさつ。墓苑創建以来の宗門主催の法要を振り返ると共に、「宗祖・日蓮上人の立正安国、世界平和実現の願いを一日も早く実現してまいりましょう」と呼び掛けた。

読経中には、午前11時50分から日本武道館で開催される政府主催「全国戦没者追悼式」に参列する各県遺族会の人々の参拝が続いた。高齢の婦人が献花し深く頭を垂れ合掌する姿が印象的だった。

花束を捧げる安倍総理

日蓮宗の平和祈願法要が終了した後、全国戦没者追悼式に出席する閣僚の参拝が相次いだ。10時50分から30分ほどの時間帯に、中川雅治環境大臣・内閣府特命担当大臣と加藤勝信厚生労働大臣・拉致問題担当大臣、菅義偉内閣官房長官、西村康稔内閣官房副長官、松山政司一億総活躍担当大臣らが参拝。

安倍晋三内閣総理大臣は11時19分に白い花束を捧げ、一礼した。参拝の様子を見ていた中年男性から「安倍さん、靖国参拝も！」と声を掛けられると、安倍総理は手を挙げて応え、場内から「おー！」という低音の歓声が上がる場面もあった。

11時40分には善隣教（力久道臣教主）の「第39回世界平和祈願徒歩の行」の一行が墓苑に到着。力久道臣教主が花輪を六角堂に捧げ、随行の首都圏の信徒らと共に慰霊の祈りを捧げ、世界平和実現への精進を誓願した。

正午前、11時50分からは市民団体「フォーラム 平和・人権・環境」主催の「戦争犠牲者追悼、平和を願う8・15集会」が催された。近藤昭一立憲民主党副代表と又市征治社民党首らが参列。正午に黙祷を捧げ、フォーラムを構成する各団体代表と参加者の献花、祈りが続いた。

今年は例年にない酷暑となったが、前日14日の新宗連青年会主催の「8・14式典」を含め、千鳥ヶ淵戦没者墓苑では宗教や思想、信条の異なる多くの団体による追悼・慰霊の恒例行事が開催された。

千鳥ヶ淵戦没者墓苑は、海外からの批判を受けることなく、誰もがわだかまりなく参拝できる国立の戦没者追悼施設となっている。

祈りを捧げる善隣教の一行

悲惨な歴史から学ぶ

沖縄宗教者の会 祈りと平和の集い

沖縄県内の神道、仏教、キリスト教、新宗教などの諸宗教者で構成する「沖縄宗教者の会」は8月15日午後1時から、糸満市の沖縄平和祈念堂で「第28回祈りと平和の集い」を開催した。

カトリック教会の信徒らによる「サムシング グレイト（偉大な力）」「平和の歌」の合唱で開式。立正佼成会沖縄教会の長沼克宗教会長が「開会のことば」を述べ、「戦後73年が過ぎ、沖縄県民の声を聞き、今私たちが生きている社会がどのようにして形成されたのか、過去の悲惨な歴史から学ぶことが重要です」と説いた。また、8月3日に逝去した翁長雄志知事の冥福を祈った。続いて、天理教那覇教区と金光教那覇教会の参列者らが献饌、玉串奉奠、祭文奏上による「平和への祈り」を捧げた。

この後、日本聖公会沖縄教区の上原榮正主教が祭壇前に進み、戦争犠牲者、震災犠牲者及び西日本豪雨災害犠牲者の慰霊、世界平和祈願の思いを込め3度鐘を撞き、参列者一同で黙祷した。

小中高生3人が「誓いのことば」を発表。天皇皇后両陛下が今年3月に沖縄へ行幸されたことに触れ、「天皇陛下が戦没者のみならず、災害により亡くなられた方々に思いを馳せ、常に民安かれ、国安かれと、誰よりも深い心で平和を祈られるお姿に感動します」と述べた。また、特攻隊員の遺書に触れ、「国を思い、家族を思いながら散った彼等のためにも、私たちは国の繁栄、世界の恒久平和を祈り続けます」と訴えた。

故翁長知事が生前届けたメッセージを司会者が代読。上原昭糸満市長のあいさつに続いて、各界の来賓、各宗派・宗教団体の代表者の献花が続いた。

天理教と金光教の参列者による「平和への祈り」

盛光寺の上江洲瑞雲住職が閉会あいさつに立ち「これからも絆を深め、沖縄宗教者の会の発展に取り組む」と語った。

対話と協調を

広島市主催 原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

広島市主催による「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」が8月6日午前8時から、広島市平和記念公園で開催された。

開式の後、松井一實広島市長と遺族代表により、この1年間で亡くなった原爆死没者名簿5393人が奉納され、名簿は115冊計31万4118人となった。

続いて式辞や献花が続き、原爆投下時刻の8時15分に合わせて平和の鐘の音が響く中、黙祷が捧げられた。

この後、松井市長による「平和宣言」。松井市長は、核兵器の廃絶に向けた取り組みが、各国の為政者の「理性」に基づく行動によって「継続」することを求めた。また日本政府には「核兵器禁止条約の発行に向けた流れの中で、日本国憲法が掲げる崇高な平和主義を体現するためにも、国際社会が核兵器のない世界の実現に向けた対話と協調を進めるよう、その役割を果たしていただきたい」と述べた。宣言の後、平和の象徴である鳩が放たれ、子ども代表による「平和への誓い」が行われた。

来賓あいさつを安倍晋三内閣総理大臣、湯﨑英彦広島県知事、アントニオ・グテーレス国連事務総長（代理）が述べた。安倍総理は「非核三原則を堅持し、核兵器保有国と非保有国の双方に働きかけを通じて国際社会を主導していく決意です」と述べた。また、グテーレス事務総長は「世界の指導者は、対話と外交の重要性を再認識し、核兵器の完全廃絶、そしてすべての人にとってより安全で安定した世界の実現に向け、再び共通の道を歩まねばなりません」と述べた。最後に参加者全員で「ひろしま平和の歌」を合唱した。

緊急事態条項に警鐘

平和遺族会全国連絡会 8・15集会

平和遺族会全国連絡会（平和遺族会、西川重則代表）は8月15日午前10時から、東京都千代田区の日本基督教団九段教会で「安保法制違憲訴訟を学べば『安倍改憲』の破綻は明らか！―自衛官を被害者にも加害者にもさせないために」をテーマに「8・15集会」を開催した。

平和遺族会は、中曽根康弘首相（当時）が1985（昭和60）年に「遺族の多くが望んでいる」として「靖国神社公式参拝」を行ったことに抗議し、翌86（同61）年に結成された。結成宣言では、戦没者遺族こそ戦争を憎み、国境や人種の差を越え、分けへだてなく人々を愛し、平和をつくり出す思いを強く持たねばならない―と訴えている。

弁護士の杉浦氏が講演

集会は西川重則代表が基調報告を行った後、弁護士で安保法制違憲訴訟の会共同代表の杉浦ひとみ氏が「戦争する国には絶対させない！」をテーマに講演。

杉浦氏は現在、北海道から沖縄まで全国22の都道府県で安保法制の違憲訴訟が提起されていることを紹介。「勝つことが難しい裁判だが、明らかな憲法違反であり、放置できない」として裁判を起こした経緯を説明した。

憲法改正の最大の争点となっている9条について、「『安保法制』によって地球上のどこでも武力行使が可能となった『今の自衛隊』が明記されることによって、9条は骨抜きになり、安保法制も違憲ではなくなる。日本は戦争をする国になってしまう」と訴えた。

また、憲法改正のもう1つの大きな争点となっている緊急事態条項については、「最も民主的と言われたワイマール憲法がダメになったのは緊急事態条項を入れたから。現状の『災害対策基本法』の運用で十分に対応できており、緊急事態条項の創設は濫用の危険性の方が大きい」と警鐘を鳴らした。

比叡山宗教サミット31周年記念

―世界平和祈りの集い―

慈悲の極みを持ち祈り

黙祷による「平和の祈り」を捧げた

比叡山宗教サミット31周年を記念する「世界平和祈りの集い」（天台宗国際平和宗教協力協会などの主催）が8月4日午後3時から、滋賀県大津市の天台宗総本山比叡山延暦寺「一隅を照らす会館前広場」で執り行われ、国内外の諸宗教代表者ら約900人が参列した。

杜多道雄天台宗宗務総長の開式のあいさつの後、延暦寺一山の式衆による法楽が営まれ、「般若心経」を読誦。森川宏映天台座主が平和祈願文を読み上げた。

森川座主は、さまざまな価値観がある現状を踏まえた上で、多様性を認めることの大切さを説き、弱者に対しての配慮が必要であることを訴えた。その上で、倫理観の崩壊を危惧し、「己を忘れても他を助ける慈悲の極みを持ち、心を込めて一日も早く恒久平和実現に向かい、祈りを捧げ、一層努力していくことを謹んでお誓いする」と述べた。

新宗連を代表して庭野日鑛立正佼成会会長のほか、仏教と神道、教派神道、キリスト教、イスラームなどの代表者が登壇。午後3時半、文殊楼横にある「世界平和の鐘」が打ち鳴らされ、参列者と共に黙祷による「平和の祈り」を捧げた。

この後、ローマ教皇庁諸宗教対話評議会議長の故ジャン＝ルイ・トーラン枢機卿、世界仏教徒連盟のパン・ワナメティー会長らの平和のメッセージが披露された。

続いて青少年の代表2人が「平和への思い」を述べた。その1人、西田友希乃さん（新宗連京都府協議会、立正佼成会京都教会所属）は、科学の進歩に伴い、便利になった半面、それが紛争の引き金や道具になっている現状を訴え、「無力な私にもできる世界平和への活動があった」として、日常の供養や、募金活動について述べた。募金活動では「多くの外国人が募金してくれ、自分が平和のために役に立ちたいという思いが国境を越えたと思った」と、活動の喜びを述べた。

最後に「比叡山メッセージ」の朗読、「平和の合言葉」を会場全体で唱和した。